

日本橋本町は「くすりのまち」の背景

日本橋本町は江戸時代から薬問屋街として有名だったので、今でも多くの製薬会社がある。試薬などを扱う小企業から、世界的メーカーまでである。

アステラス製薬 本社、クマヒラ本社、第一三共 本社、鳥居薬品 本社、小津産業 本社、田辺三菱製薬 東京本社、興和 東京支社

くすりがつくった町

1590年8月、はじめて江戸に足を踏み入れた徳川家康は、ただちに城下の橋普請に取りかかった。

新たにかける橋は273橋を数え、江戸城普請も相まって、近郷から集められた人足の数はたいへんな数字にのぼった。その人夫の間に流行した眼病によく効いて評判を高めたのが目薬「五霊膏(ごれいこう)」だった、という。

「五霊膏」は1593年、家康が城下町割を最初に行った日本橋・本町4丁目に移り住んだ小田原の薬種商益田友嘉が、寒水石・竜腦・黄連などを白蜜で練って貝殻の容器に入れ、店棚に並べて売ったのがはじまりである。

1614年には堺の松本市左衛門が屋号を「いわしや」として、家伝薬「調痢丸(ちょうりがん)」の販売をはじめると、本町は堺・京都の薬種商が集団で居住するくすりの町としてにぎわいはじめたのである。

1600年 関ヶ原の戦い、徳川家康は医薬に詳しく、陣中薬の先鞭。1689年 元禄初期に薬種問屋「きぐすりや」の座が大阪道修町と江戸本町に誕生。

当時、医者や居ない村が大部分、居てもアクセス困難。そこで民間薬(マクリ、センプリなど)が大いに利用され、効き目の確かなものを選別。

1722年 将軍吉宗が小石川薬園内に小石川養生所を設立し、貧民を救療。

日本橋本町で2013年10月15日、「薬祖神祭」が開催された。

江戸時代に始まる薬問屋街である同町。現在も第一三共やアステラス製薬など、製薬会社が本社を置く。同祭は1908(明治41)年、東京薬種貿易商同業組合(現・東京薬事協会)が五條天神社(台東区)から医薬の神の御霊を迎え、同町で行った大祭が起源。1929(昭和4)年からは同会事務所建物の屋上に薬祖神社を造営し、祭りの規模も盛大になった。1954(昭和29)年以降は、薬業界だけでなく地域の行事にしようとして奉賛会を結成、1983(昭和58)年には新たに竣工した「昭和薬貿ビル」の屋上に新社殿を造り、祭儀を継承している。

同会の会員企業は現在197社。会員には、縁起飾りの「神壺(しんこ・札・おかめ笹の3点セット)」を配布し、会員名が書かれた「奉納ちようちん」約230張りを配列し夜間点灯する。また、同会が都から委託され運営している「東京都薬用植物園」(小平市)で栽培した薬草を持ち込み、会員有志が制作した生け花を会場に展示し、都民への薬用植物のPRを行う。

当日は14時から、五條天神社の宮司が齋主となり、奉賛会役員などが参列する式典が行われた。一般参拝は15時30分から始まり、18時前後に人出はピークに。参拝者に振る舞われる小舟町の老舗「日月堂」のお汁粉には例年通り長蛇の列ができた。

同会副会長の金原徳典さんは「因幡(いなば)の白うさぎの伝説があるように、大穴牟遲神(オオナムジ)は古い薬の神様。医薬業界は伝統的に神様を祭っている。外資の参入や企業の統合などが多く会員の構成も変わってきたが、これからも守っていきたい」と話す。

江戸・本町の発展

本町における和薬種改会所は1722年、伊勢町表河岸に設けられ、和薬真偽の吟味をはじめた。

各地方から江戸に集まる和漢薬種は必ず改会所で検査を受けること、本町の薬種問屋に限り地方出の和漢薬の直荷請ができることなどの特権を、大坂道修町・京都二条の薬種商にさきがけ、本町の二十五人の薬種商に授けた。

幕府は和漢薬の検査の必要なことを痛感していたものの、多量で多岐にわたる薬種を管理する手段を得ず、本町薬種問屋組合の薬種商二十五人に附与したのである。

1687年に刊行された『江戸鹿子』によると、江戸には36軒の薬種問屋・製薬屋があったという。医者数は72と記載されている。

十八世紀はじめには江戸の人口は100万人に達した。1721年の調査では町屋の人口は50万人であり、104軒のくすりやがあったと『江戸惣鹿子』(1751年刊)に記載されている。

化政文化に代表される19世紀初頭、江戸を訪れる人びとの買い物ガイドだった『江戸買物独案内』には、生薬屋が206軒、薬種屋が51軒、掲載されている。

同じく観光案内として全国に知られていた『江戸名所図会』には、さまざまな看板が立ち並ぶ本町の薬種店や、著名売薬の「錦袋円(きんたいえん)」の店先などが表情豊かに描かれている。